



愛と呼ばないで

青井 由



# 愛と叫ばないで (1)

プロローグ — 2005年3月

1. 2002年4月
2. 1993年4月
3. 2003年12月

春の嵐とも言える強風が、朝から吹き続けていたことは覚えている。

その日は「箱庭」の、高等部の卒業式だった。卒業証書を貰い、謝恩会を終えた日の夜に、こんなことをする姉を、翠（みどり）は正気とは思えなかった。

「お姉ちゃん！ こんなこと止めようよ！ 今ならお父さんもお母さんも、許してくれるって！」

暖かさを含む強い南風に煽られ、髪やスカートの裾を巻き上げながら、翠が叫ぶ。

家の門を出た所で、大きなキャリーバッグ一つを持った姉は、翠へと振り返る。そして、妹の言葉には従うことなく、悲しげに首を振るだけだった。

「ごめんね、翠。もう限界なんだ」

「何言ってるのよ！ とにかく戻ろうよ！」

まったく要領の悪い姉だ、と翠は呆れながらも、何とか姉を引き留めようと声を振り絞った。だが、持病の喘息の発作が出つつあり、すぐそこに苦しさが迫っている。

「翠、もう会えないと思うけど、体を大事にするんだよ！ 無理したら、あんたはすぐ寝込むんだから！」

姉は精一杯の笑顔顔を顔に浮かべ、強風に負けないように手を振る。そして翠に背を向けると、キャリーバッグを引いて、駅の方へと歩いていった。

「お姉ちゃん！」

やっとのことで振り絞った翠の声も、すべて風の中に掻き消されていく。その微かな声の欠片を耳にしながら、姉は振り返ることなく、足を前へと進めていった。

後悔はない。というよりも、これからは後悔など、一つもしない生き方をしよう、と心に誓っていた。

誰の顔色も窺うことなく、自分の気持ちに素直に生きる。これまで開くことのできなかった、大きな翼をはためかせ、自分の力で歩む。そんなこれからの日々こそが、本当の私の人生。そして、本当の私の生きる道だ、と。

そう思いながら、豪邸の建ち並ぶ中を歩いていくと、一つの街頭の下に人影が見えた。

風に巻き上げられる髪を耳にかけ、目を凝らす。すると、オレンジ色の明かりの中に、あの男の姿がはっきりと見えてきた。

思わず怯み、立ち止まると、男は無言でこちらへと近寄ってくる。その顔は不思議なほどに無表情だった。そして目の前で立ち止まると、男はその顔に、いつものように軽蔑と、憎悪を混ぜ合わせた表情を浮かべていく。

「家を出て、どうする気だよ」

風の中に響く、男の低い声に、思わず息を呑む。だが、拳を強く握り締め、男から目を離すことなく、「あんたに関係ない」と呟いた。

すると男は、「何言ってるんだよ。関係あるだろう？」と、苦しげに笑いながら答える。

「何せ俺は、お前の婚約者だからな」

「だから、もう関係ない！」

彼女は風を弾き飛ばさんばかりの大声を上げ、男を睨みつける。

「私はもう、この『箱庭』から出ていくの！ だからあんたとは関係ない！ それに、あ



んたは私のことが嫌いでしょ？」

すると男は一瞬、ぴくり、と眉を動かした。その時だけは、十代の青年らしい彼の表情も、長年の苦しみを堪えた老人のように見えてしまう。

「あんたは私のことを嫌いなんだから、私がいなくなれば丁度いいじゃない！ 私と結婚しなくて済むんだから！」

彼女の言葉に、彼の顔が更に悲しげに歪んでいく。だが、すぐに男はいつものように不適に微笑み、ははは、と声を上げた。

「おい、アイ」

彼女のことを「アイ」と呼ぶのは、この男だけだった。怒りが募り、彼女は男の胸に拳をぶつけながら叫ぶ。

「その呼び方は止めて、って、何度も言ってるじゃない！」

すると男は、彼女の手を取り、顔を近づけた。突然のことに驚いた彼女は、顔を背けることも忘れて、思わず息を止める。いつもとは違う、切羽詰まった彼の表情を目の中に映し込み、その視線を受け止めていた。

「俺から逃げ出すのであれば、もう二度と、俺の前に現れるな」

微かに震えた声で告げると、男は彼女の手を離し、街灯の先にある暗闇の中へと消えていった。

耳を澄ませば、遠くから鈴の転がるような、明るいはしゃぎ声が聞こえてくる。続けて、桜色の背景が広がっていく中に、ぽつりぽつりと、揃いの紺色のブレザーを着た少女たちが現れてきた。

首元のリボンが水色であることを見ても、彼女たちは、「箱庭」の高等部の学生だろう。桜の花びらが舞う中を、人形劇に出てくるパペットのように、己の立場を弁えて、楽しそうに振る舞っている。

それぞれの顔には、詭えられた笑顔の仮面が、いつものように付けられていた。「楽しそうな女子学生」という演技を続けるための、大切な仮面だ。そんな少女たちの、その裏にある本当の表情など、誰も知ろうとはしない。

それでも彼女たちは、こうしてずっと演じ続けるのだ。彼女たちを愛する者たちのために。

そう言えば、自分だってこの中にいたはずだった、とマリは思い出した。自分の立場を踏み外さぬように、仮面を外さぬように、と、まるでそれが人生の命題であるかのように、生きてきたはずだったのではないか。

だけど、いつからだったろう？ そんなことに何の意味も見出さなくなってしまったのは。

そんなマリの自問自答を打ち消すように、少女たちは明るい声を上げ続けている。その中には、妹の翠の声も混じっている。

「お姉ちゃん、どうしてそこにいるの？ こっちにおいでよ！」

そして、翠らしき人影が目の前に現れ、こちらへと手を伸ばす。だが、その手を取る訳にはいかない。

ごめんね、翠。私はもう違うんだ。「箱庭」から自ら抜け出した人間は、もうそこには戻れないんだよ。そして、戻りたい気持ちさえ、これっぽっちも残ってはいないんだ。

そう叫び、声を囁らしていると、不意に黒い影が近くへと迫ってくる。何かと思い、その影のある方へと振り向くと、そこにはあの男の姿があった。

「アイ」

いつものように、その呼び名でマリを呼ぶと、急に周りの景色が暗くなっていく。

「もう二度と、俺の目の前に現れるな」

あの時と同じ言葉が響くと同時に、辺りから少女たちの声が消え、目の前が真っ暗になっていった。



「マリさん！ マリさん！ 起きてください！ そろそろ開店の時間ですよ！」

エタニティの香りと共に、体を揺す振られ、マリは重い瞼をゆっくりと持ち上げていく。

やっとのことで開いた目へと飛び込んできたのは、さっきまで見ていた、あの「箱庭」の世界ではない。ベージュ色の壁と、グレーのロッカーに囲まれた、いつもの控え室の風景だ。様々な香水の匂いが溢れる部屋の中では、色とりどりのドレスに身を包んだキャ

バクラ嬢たちが、夜の蝶としての羽ばたきを待っている。

そんないつもの見慣れた景色の中に、自分がいることに安心し、マリは腰掛けていた椅子の背凭れに寄り掛かる。そして額に手を当てて、ふう、と息を吐き出した。

「大丈夫ですか、マリさん」

マリを起こしたスマレが、花を散りばめた盛り髪を揺らして、心配そうに顔を覗き込んでくる。マリはすぐさま笑顔を作り、「うん、大丈夫！ 起こしてくれて、助かったよ」と、スマレの肩を優しく叩いた。

「珍しく高校の頃の夢を見ちゃってさ」

開店前だと言うのに、疲れた表情を見せるマリに、スマレが「え？ 高校？」と高い声を上げる。

「マリさんって東京出身ですよ？ 高校は何処だったんですか？」

「桜庭学院」

マリの即答に、控え室にいたキャバクラ嬢たちが皆、彼女へと視線を集め、ざわめき始める。

「マリさーん！ いくら何でも冗談が過ぎますよ。いつも下ネタバリバリの、ナンバーワンキャバ嬢が、あの桜庭出身って！ マジでないわ！」

「それなら、マリさんが超お嬢様、ってことになっちゃうじゃないですか！」

若いキャバクラ嬢たちの、笑いを混ぜ合わせた声に反応して、マリも「そうなのよー。私、実はお嬢様育ちでさ」と、冗談めかして答える。

「家には執事やお手伝いさんがいたので、箸より重いものを持ったことがございませんの！」

マリがわざとらしく、おほほ、と笑うと、近くにいた巨乳が自慢のミカが、携帯電話をいじりながらツッコミを入れる。

「今は水割り用の氷入れを、五個ぐらいは片手で持ってるくせに一！」

「でも昔は違ったのでございますのよ！ 実は、親が決めた婚約者もいましたのよ！」

「やだぁ！ マリさん、ウケるー！」

キャバクラ嬢たちがそれぞれに、マリの言葉をジョークだと解釈し、笑いを見せると、マリも「でしょー！ ウケるよねー！」と、いたずらっぽく笑う。

「これ、私の鉄板ネタなの。『マリちゃん、学校は何処の出身？』『桜庭学院です』。もうこれで、スベリ知らずよ！」

小学校から大学までの一貫教育で知られ、良家の子女ばかりが集まる桜庭学院に、キャバクラ嬢が在籍していたなど、誰が信じるだろうか。やはりここは、隠れ蓑とするには素晴らしい場所だ、とマリは安心して、息を吐き出す。

「それにしても、マリさんにしては珍しいですね。開店前に居眠りしてるなんて」

ロッカーに凭れて、煙草を吸っていたエリカに声を掛けられ、マリは「んー、ちょっと疲れててさ」と、背伸びをしながら答える。

「昨日、篠田さんとのアフターが二時までで、結婚式に出るために七時には起きたもんだから、寝不足なんだよねえ」

「うわっ！ 超ハードじゃないですか！」

エリカが苦いものを口にしたかのように、露骨に顔を歪める。客に対してはいつもクールに澄ましていることが多い、彼女のあからさまな表情。これを客が見たらどう思うか、

とマリは滑稽に思いながら、「まあね」と肩を竦める。

「だから今日は同伴はなし、なんだけどね」

するとスマレが再び、横から口を挟んでくる。

「その結婚式って、友達のですか？ それとも親戚の？」

「友達。ほら、ガード下にあるビアバーの、カウンターにいた女の子が結婚したんだよ」

今日の結婚式で見た、新郎と新婦の姿を思い出し、マリは不意に頬を緩ませる。

「幸せそうだったなあ。人の幸せな姿を見るのって、いいモンだよなあ」

純白のウェディングドレスに身を包んだ新婦の姿は、幸せそのものを体現しているかのようだった。それは、決して自分には手に入れられないものであろうことは、マリは十分に分かっている。

あの類の幸せに、手を伸ばしてはいけないのだ。さっき見た夢の中で、翠の手を掴む訳にはいかなかったのと同じように。

普通の幸せを捨て、諦めてこそ、今の自由がある。それを忘れないように、とマリは心で唱えていると、入店して半年のルイが、こちらへと顔を近づけてきた。

「睡眠不足はダメですよお、マリさん！ お肌が荒れてますう！」

舌っ足らずな声を上げながら、ルイはわざと膨れっ面をして見せた。小太りなマルチーズのように丸まったその顔は、健康そのもののように、キラキラと輝いている。

「あら、そんなルイちゃんは、今日はやけにお肌がツヤツヤじゃない？ もしかして昨日のお休みは、彼とやりまくり？」

マリがにやついた笑顔を向けると、ルイはまんざらでもなさそうに、「いやーん！ マリさんったらあ！」と体をくねらせる。

「もちろんですうー！ 彼ったら、もう激しくってえ！」

ルイの、のろけ話に付き合うと、何時間あっても足りないことを知ってはいるが、マリはあえて、彼女の話に耳を傾ける。年若い後輩の話聞くことも、キャバクラ嬢としてベテランの域に達しているマリの、仕事の一つでもあるからだ。

マリがこのキャバクラ、「ミラージュ」に入店して、既に四年が経っている。人の入れ替わりの激しいこの業界で、長期間同じ店で勤務を続けるのは珍しいことだとは知りながら、マリは長々とこの店での勤務を続けていた。そして「『ミラージュ』のナンバーワンキャバ嬢」としての地位を、確固たるものとしていたのだ。

「おーい、時間だぞ！」

キャバクラ嬢たちの話し声が響く中に、ノックの音と、店長の黒瀬の声が聞こえてきた。すると、キャバクラ嬢たちは皆、「はい」と甘い声で返事をし、気怠い足取りで控え室を出ていく。

最後にマリが出てくると、ドアの横で立っていた黒瀬は、目を細めることなく笑顔を浮かべ、マリの背中を叩く。

「今日も頼んだぞ、マリ姉さん」

六歳も年上のおっさんに、「姉さん」呼ばわりされる筋合いはない、とは思いつつも、マリは「はいはい」と適当に返事をする。

すると黒瀬は、制服とも言うべき黒服に包まれた腕を組み、「おい、マリ」と声を掛ける。そしてじっと、マリの顔を見つめた。

「お前、肌荒れてないか？」

「あー。今日は、ちょっと寝不足だね」

「おいおい、気をつけろよ。若くねえんだから」

二十六歳の自分が、キャバクラの世界において、既に年増の部類に入っていることは、マリも重々承知だった。だが、それを自覚するのと、人に年増扱いされるのでは、話が違おうだろう。

その腹立ちまぎれに、マリは店へと続く通路を歩きながら、「あら、若くないのはお互い様でしょ？」と呟く。

「店長もさ、老け込んでアソコが勃たなくなる前に、さっさと彼女と結婚しちゃいなよ」

その言葉に、一瞬真顔になった黒瀬は、すぐさま顔に皺を寄せて、くく、と笑う。

「さすがはマリだな」

こんな戯れ言ごときで、「さすが」などと言われたくはない。

「あらそう？ とりあえず誉め言葉として、その言葉を受け取っておくわ」

こんなことを平気で言える大人になってしまうなど、あの「箱庭」にいた頃の自分は、考えもしなかつただろうに。マリは複雑な気持ちを抱えたまま、背後の黒瀬に振り返ることなく、ホールへと進んでいく。

それでも黒瀬は、頼もしそうな視線をマリの背中に向け、オールバックに整えた髪を撫で付けた。

「その調子で、今日も頼むぜ。早速三番テーブルに、山内さんが来てるからな」

「え？ 山内さんが？」

マリは思わず歩みを止めて振り返ると、黒瀬が驚きの表情を見せた。

「山内さんが、どうかしたのか？」

「あの人、今日誕生日だったはずなんだけど」

そうだ。今朝、起き抜けに、山内へと誕生日を祝うメールを送ったのだ。間違いない。

マリは大きく目を見開くと、ボーイの加藤がホール近くにいるのを見つけ、突然早足になった。

「店長！ ちょっと加藤ちゃんを借りていい？」

「ああ、別にいいけど」

黒瀬の返事を聞くや否や、マリは加藤の前へと駆け寄った。

「加藤ちゃん、ごめん！ お使い、頼めるかな？」

「は、はい！ 大丈夫ですけど」

マリは加藤に簡単に用件を伝え、ハンドバッグから一万円札を取り出し、手渡す。

「で、私が合図したら、それを持ってきてくれる？」

「は、はい。分かりました。了解っす！」

軽くウエーブのかかった髪を揺らすように、加藤は頷くと、裏口に向かって走り出していった。急いで外へと出ていく彼の後ろ姿を見送り、マリはほっとしたようにため息をつく。そして、通路の途中にある鏡を覗き込んだ。

素顔が分からないほどに、徹底的にメイクされた自分の顔を見て、さっき夢で見た、仮面を被った少女たちの姿を思い出した。よく考えたら、このメイクも、仮面なのかもしれない、と。

あの桜の舞い散る「箱庭」では、「いい子」の仮面を付けることを拒否した自分が、厚化粧という仮面を喜んで装着し、「マリ」という仮の姿を晒していることが、不思議でな



らない。

いや、不思議に思いながらも、こうして平然と「マリ」でいられるのだから、ここが自分の生きるべき世界、ということなのだろう、とマリは思った。このキャバクラこそが、私の住み処なのだ、とマリは気合いを入れ直し、仮面が剥がれないように、と願いを込める。

そしてホールへと一歩足を踏み入れれば、その彼女の顔は仮面ではなく、「マリ」そのものの顔となっていく。

ホールの中は、開店直後だと言うのに、かなりの賑わいとなっていた。殆どのテーブルに客が入り、それぞれにキャバクラ嬢たちがついて、笑顔を振り撒いていた。

質のいいキャバクラ嬢が多いことで有名な、この「ミラージュ」には、目当てのキャバクラ嬢に会いたくて、やって来る客が殆どだった。だがそれだけでなく、そんなキャバクラ嬢たちのレベルの高さを見込んで、接待に用いる客も少なくない。

そんな人々がざわめく中を、マリはゆったりと歩いていく。背筋を伸ばし、シャンデリアの放つ光の粒を、露出した肌を感じながら笑みを零す。それはまるで、あの頃、彼女がバレエの舞台上で踊っていた様子によく似ていた。

空を飛ぶかのようなグランジュテに、軽快なピルエット。そんな技を決めることはないものの、この「ミラージュ」は、まさにマリの舞台であり、彼女こそがこの場のプリマ・バレリーナだった。

彼女がホールの中を歩む姿を、店じゅうの客やキャバクラ嬢たちが、憧れと欲望の眼差しで見つめる。その視線を一身に受けることが、マリにとっての何よりも快感だった。

もったいぶるほどのスローな歩みを、やっとのことで四番テーブルのソファの横で止めると、マリはそこに腰掛ける山内の肩に触れた。

「山内さん、いらっしゃい！ お誕生日おめでとう！」

「マリちゃん！」

こちらへと振り向いた山内の顔には、疲労の色が見える。目の下にもクマがあり、顔色もあまり良くはなかった。

「今朝はメールありがとうな！ あのメールを見たら、何だかマリちゃんに会いたくなっただよ」

実業家らしからぬ、無邪気な山内の表情を見て、マリもにっこりと微笑む。あんなのはただの業務用メールなのに、と思いながらも、マリは「本当？ 嬉しい！」と肩を竦めて喜びを表した。そして山内の隣へと腰掛けながら、ヘルプでついている、後輩のキャバクラ嬢のサクラに目で合図をする。

「そんなに喜んでくれるなら、毎日『お誕生日おめでとう！』って送っちゃおうかな？」

「おいおい、そんなに歳を取らせないでくれよ！」

「そうだよねえ。毎日誕生日だったら、半年後には百歳になっちゃうもんねえ」

そんな他愛もない会話を交わしながらも、マリは既に空いている山内のグラスを手に取り、水割りを作る準備をしていく。そして、その際の一つ一つの仕草にも、マリは決して手を抜かない。

グラスに氷を入れる時の指の動き。酒を注ぐ時の手のライン。煙草に火を点けるために、ライターを差し出す動きの滑らかさ。その全てが美しく見えるように、と常に考えている。

幼い頃に、祖母から茶道を叩き込まれたお陰もあり、マリの所作は滑らかで、美しかった。男というのは、こうして下心満載で女と相對している時でさえ、その女の些細な仕草をよく見ているものなのだ。

マリは水割りを作り終え、グラスを山内の前へと差し出すと、山内はそっとマリの胸へと手を伸ばしてきた。

キャバクラ嬢の体に触りたがる男はごまんという。この山内だって毎度のことなのだ、とマリはそれを軽やかな身のこなしでかわし、行き場をなくした山内の手を握り締めた。そして、彼の顔を上目遣いで見つめる。

「こうやって誕生日にも来てくれるのは嬉しいけど、ご家族とはお祝いしないの？」

優しげに尋ねるマ리에、山内は気まずそうな顔をして、「いや、家のことはいいんだよ」と小さな声で答え、水割りのグラスを受け取る。その言葉に、マリは笑顔を崩すことはなかったものの、やっぱりな、と心の中で舌打ちをした。

マリの最顧客の一人である山内は、IT関連の事業を展開する、ベンチャー企業の社長だ。「俺が日本を変えてみせるよ」というのが彼の口癖で、一回りほど年齢の離れたマ리에、仕事上の自慢話をするのが常だった。

そんな山内が最近、妻との関係が芳しくないであろうことは、彼の言葉の端々からマリは気づいてはいたのだ。

山内のような客は、幸せな家庭があってこそなのに、とマリは思いながら、ちらりと控え室に続く通路の方へと目を遣る。するとそこに加藤が戻って来ていて、マリに向けて指でOKサインを出している。

よし、とマリは頷くと、突然大きな声を上げた。

「ハッピーバースデー！ 山内さん！」

それと同時に、バースデーケーキを持ったボーイの加藤が、マリのいるテーブルへとやって来た。将棋盤ほどはありそうな、スクエアタイプのケーキが目の前へと置かれると、その上に灯るキャンドルの炎を見ながら、山内は目を丸くした。

「マ、マリちゃん！ これ、どうしたんだ？」

「せっかく誕生日に来てくれたんだから、お祝いしなきゃ、って思ったの！」

その言葉を聞き、ゴルフ焼けした顔を赤くして照れる山内の横で、マリは不意に立ち上がり、店じゅうに響く声を上げる。

「みなさん。お楽しみのところ、申し訳ありません！ 今日は私の大好きな山内さんの、お誕生日なんです！ 是非みなさんでお祝いしてくださいー！」

そして続けざまに「Happy Birthday To You」を歌い始めると、店内の客やキャバクラ嬢たちが、手拍子しながら一緒に歌い出す。汗をかいても、落ちず、崩れず、よれないメイクを施した顔を、マリは心から嬉しそうに綻ばせて、山内を見ながら歌い続ける。

「ハッピーバースデー、山内さん！」

皆で歌い終わると、マリは再びソファに座り、そっと山内の肩に触れた。

「ほら、早くロウソクを消して！ 山内さんは二十歳だよな？ だからロウソクも二十本しか点いてないから！」

本当のところ、山内は三十九歳になったのだ。そんなマリお得意の冗談に、山内はもちろん、ヘルプのサクラや、テーブル横で跪く加藤、そして店じゅうの者が皆、楽しげに笑

い出す。

すると、最初は照れくさそうだった山内も、乗せられるように、ロウソクを吹き消した。

「おめでとう！ 山内さん！」

そう言って、マリは山内に抱きつくのと、彼の頬にキスをした。皮脂でギラついたオヤジ肌にキスすることも、仕事と思えば辛くはない。マリの真っ赤なキスマークを頬につけて、満足げな山内は、鼻息を荒くして、横に控えていたボーイの加藤に声を掛ける。

「おい、ケーキに合う酒って何だ？」

その言葉を聞き逃さず、マリは山内を抱き締めたままで、加藤へと視線を向ける。加藤もそれに応じるように、小さく頷くと、山内へと向き直した。

「そうですねえ」

もったいぶるように小首を傾げた後、加藤は何かを思いついたかのように、目を見開く。

「やはり、シャンパンでしょうかね？ ロゼが合うと思いますよ」

「よし、マリちゃん！」

山内は上機嫌な様子で、マリの肩へと手を回し、強く引き寄せる。細身の体を、柳のようにしならせて山内へと寄せると、マリは上目遣いで山内を見た。その視線に、スケベ心を刺激されながら、山内は「今日はシャンパンを、みんなが飲めるだけ頼んでやる！」と大声で叫んだ。

「いいか！ 今、この店にいる、みんなの分のシャンパンだぞ！ 今日は俺の誕生日なんだから、みんなと祝おう！ 今すぐ持って来い！」

すると、おお、と、地鳴りのような歓声がホールに響く。その声の主である、客やキャバクラ嬢たちは皆、驚きと喜びを混ぜ合わせた顔をしていた。

「ありがとう！ 山内さん！」

マリも思わず笑顔になり、山内へと寄せていた体を、更に密着させ、擦り付ける。そして山内の胸を撫でるように手を沿わせながら、バーカウンターの近くにあるレジへと目を遣った。そこでホールの隅々にまで目を光らせている黒瀬と視線を合わせ、お互いに頷き合う。すると黒瀬は、「毎度あり」と言わんばかりにほくそ笑みながら、電卓をわざとらしく叩き始めた。

そのうちに、数人のボーイによって、店じゅうの客とキャバクラ嬢に、山内からのシャンパンが振る舞われていく。そして皆に感謝の言葉を掛けられていくと、山内は疲れた表情を明るなものへと変えていった。

よかった。これならば大丈夫。

「やり手の若手経営者」としての顔を取り戻した山内を見て、マリはほっとしていた。たとえここで金を落としてくれるにしても、客にとっても何らかの利点がなくは、とマリは接客の時にいつも考えているからだ。

すっかり元気になった山内は、いつものように仕事自慢をマリへと繰り広げ、満足げに店を後にしようとした時、マリも見送りのために、彼と一緒に外へと出た。

露出の多いドレスでは、もう夜風が冷たい季節になったことを実感しながら、マリは「ねえ、山内さん。これ」と、山内に小さな紙袋を手渡す。

「ん？ 何だ、これ」

山内が不思議そうな顔で紙袋を覗き込むと、そこには、赤い包装紙に包まれた箱が入っていた。

「それね、豊洲にできたショッピングモールで売られてる、最近話題のスイーツなの。この前、山内さんにプレゼントしようと思って、買っておいたんだ！ だから、これ、奥さんに持って行ってあげてよ」

「えっ？ よ、嫁に？」

「そう！ 奥さんに！」

妻の話題を出されて、驚きの様子を見せる山内の緊張を解そうと、マリは優しく目を細め、彼の耳元に唇を寄せた。

「山内さん、最近奥さんが冷たい、って言ってたじゃない？ だから、今日はこれを奥さんに渡して、『一緒に誕生日を祝おう』って言うてみて！」

山内はまだ腑に落ちない様子で、マリと紙袋を何度も見返している。その様子を苦笑いしながら見て、マリは山内の手を取り、両手で強く握り締めた。

「そして、ちゃんと奥さんに、『いつもありがとう。こうして俺が何事もなく、三十九歳の誕生日を迎えられたのも、お前のお陰だ』って言うてあげるの！ そしたら、絶対に奥さんも喜ぶって！」

「マ、マリちゃん！」

山内は一瞬で顔をくしゃくしゃにし、泣き出しそうな顔になると、思わずマリに抱きついた。

「マリちゃんは本当にいい子だなあ！ 俺が独身だったら、さっさと嫁にしてるぞ！」

「はいはい、ありがとう！ 生まれ変わったら、結婚しようね！」

赤子をあやすように山内の背中を撫でると、マリは山内の手をゆっくりと解いて、彼の顔を真正面から見た。

「山内さん、いい？ くれぐれもこのお菓子、貰い物だなんて言っちゃダメだよ！ 自分で買った、って言うてね！」

「ああ！ 分かった！ ありがとうよ！」

「お礼なんていいの！ また来てくれるだけでいいんだからね！」

山内がこちらへと何度も振り返り、手を振りながら去っていくのを、マリはお辞儀をして見送る。

近くにある大きなビルの角を曲がって、やっと山内の姿が見えなくなる。するとドアの近くで控えていたボーイの加藤が、「さすがマリさんだなあ」と、感嘆のため息を漏らした。

「キャバ嬢が、お客の奥さんの心配までするなんて、普通じゃ考えられないっすよ！」

「はあ？ 普通のことだよ、普通！」

さっきまでの愛嬌が何処かに行ってしまったかのように、マリは表情を渋いものに変え、眉間に皺を寄せた。客が去ってしまえば、冷たい夜風が一気に身に染みってくる。思わず軽くくしゃみをし、体の震えを抑えるように、マリは自分の肩を抱き締めた。

これからは、使い捨てカイロを貼っておかなくてはいけない時期だ、と思いながら、星の见えない夜空を見上げる。

「家庭を持ってる男が、自分の誕生日に、わざわざキャバクラに来なくたっていいんだよ！ 家庭があるなら、誕生日ぐらい、家で祝うモンでしょ？ それだけ、奥さんと上手

くってない、って証拠だからね！」

「でも、いいじゃないですか。奥さんと上手くってないなら、うちに通う回数も増えそうだし」

「違うの！ 山内さんみたいな人は、幸せな家庭があってナンボなの！」

マリは決して、客を不幸にはしたくなかった。たとえ、客を自分に入れ込ませたとしても、家庭内の不和や破産などといった、身の破滅へと引きずり込むことは、マリの望みではない。

このキャバクラという場所は、浮き世の憂さを晴らすために存在している、別世界なのだ。そのために、この別世界で金を使い、元気になってもらう。そして必死に働いて、またここに憩いに来ればいい——それが一番、マリにとっても、客にとっても、ギブ・アンド・テイクの理想の形のように思っていたのだ。

「ああいうおっさんはね、バリバリ働いて、幸せな家庭で日々癒やされればいいの！ そしてその反動で、はしゃぎたい時や、気晴らししたい時に、ここに来て、金を落としてくれりゃあいいの！ ああいう人に対しては、それが一番効率的な金の巻き上げ方なんだよ！ 覚えておきな！」

さっきの山内のように、疲労の色を見せていたにもかかわらず、ここで過ごすことによって、明るく元気になってもらうこと。それこそが自分の役目だと、マリは思っていた。その役目を全うしていれば、売り上げは自然と付いてくるものなのだ。

堂々と自分の信条を述べるマリの姿を、加藤は尊敬と感心の入り交じった視線で見つめていた。彼女の細身の体からは、表現しがたい強いオーラが出ているようにさえ思える。それは、他のキャバクラ嬢からは感じることもないものだった。男の加藤から見ても、「カッコいい」と思えるような、凛々しさが彼女にはあったのだ。

「そう言えば、さっき山内さんに渡してたお菓子ですけど」

加藤はマリに見惚れながら、ぽつりと呟く。

「本当にわざわざ、山内さんのために買っておいたんですか？」

「まさか！」

マリは肩を竦め、ふん、と鼻を鳴らす。

「私のロッカーの中には、いざって言う時のために、賞味期限の長い和洋菓子の買い溜めがあるの！」

すげえな、と加藤が感心していると、マリが「あ、そうだ」と何かを思い出したように、加藤の肩をポン、と叩いた。

「加藤ちゃん。お使いありがとうね」

山内のバースデーケーキを買って来てもらったことに対して、マリが労うと、「いえ。これぐらいのことなら」と加藤はくすぐったそうにはにかんだ。そして、ポケットから五千円札と小銭を取り出して、マリへと差し出す。

「これ、ケーキのお釣りで」

「ん？ 要らないよ！ それ、加藤ちゃんが取っておいて。お駄賃ってことで！」

マリの言葉に、嬉しさを感じながらも、驚きの方が上回ってしまい、「えっ！ こ、こんなに？」と、加藤は上擦った声を上げた。

「いいの、いいの。取っておきなって！」

客に見せる笑顔とは別の、リラックスした微笑みを、マリは加藤へと向ける。ボーイに



優しくしておくことは、このキャバクラの世界では、とても大切なことだ、とマリは思っていた。

ボーイは下働きのような存在でありながらも、客と接する機会も多い。客をテーブルへと案内するのも、飲み物をテーブルへと持ってくるのも、ボーイの役目だ。

常日頃から、マリは加藤を始めとするボーイたちへと、心遣いを欠かさなかった。そのせいもあり、ボーイたちは皆、マリの客をとて手厚くもてなしてくれている。マリのよ様な売れっ子になると、指名客をテーブルに長時間待たせることが多い。そんな時にボーイが客に上手く声掛けをしてくれるだけで、待ち時間を過ごす客の心持ちも変わるのだ。「じゃあ、そろそろ戻ろうか」

マリが告げると、加藤は両手で重いドアを開ける。そこから店内へと戻っていくと、黒瀬がこちらへと寄ってきて、すぐさま声を掛けた。

「おい、マリ！ 十二番テーブルで坂田さんがお待ちだよー」

「はい」

その時、加藤が閉めようとしていたドアの隙間から、突風が吹き抜けた。それが勢いよく店の中へと入り、マリのドレスの裾を巻き上げる。その風を全身で感じながら、彼女は思わずあの時のことを思い出した。

それは、家を飛び出した、あの春の夜のことだ。

あの日の夜も、こんな風に強い風が吹いていた。膨らみ始めていた桜の蕾をちぎり取りそうな突風の中で、マリを引き止めようとしていた翠の姿が、ふと頭に浮かんでくる。

それを必死で掻き消そうと、マリは頭を振る。しかし、かえってその面影は鮮明になっていき、あの男の姿まで、はっきりと浮かび上がってきた。

ダメだダメだ、とマリは自分を奮い立たせ、入口近くにある大きな姿見を覗き込む。その中に映る、「マリ」という自分の姿を確認し、安心して、姿見に背を向けた。

今のこの姿が、私の仮面。そしてここが私の舞台であり、私の生きる場所なんだ。

そう心で呟き、全ての思い出を消し去ろうと、颯爽と五番テーブルへと進んでいった。

翌日の夕方、マリはいつものように、馴染みの美容師に栗色の髪を巻きおろしにしてもらい、美容室を出た。

今日は睡眠時間もたっぷり取れたので、化粧ノリもいい。そして、ここに来る前に変えてもらったネイルも、ボルドー色をベースに可愛くできた。そのお陰で上機嫌のマリは、お気に入りのロングブーツを見せびらかすように、ゆっくりと「ミラージュ」へと向かって足を進めていた。

「ミラージュ」の入るビルの裏へと辿り着くと、従業員用の出入口の重いドアを開け、体を滑り込ませる。そして薄暗い通路を抜け、事務室へと入っていった。

「店長、おはようございます！」

「おう！」

煙草を啜えながら机に向かっていた黒瀬は、右手を挙げて答える。

黒瀬は既に黒服に着替えているものの、ネクタイを付けてはおらず、髪も整えてはいない。下ろされたままの前髪を、うざったそうに掻き上げては、難しそうな顔をしている。そして細身の体をパソコンに向け、ただでさえも悪い目つきを、更に恐ろしいほど鋭くして、画面に見入っていた。

タイムカードを押すために、マリが事務所の奥へと入っていくと、黒瀬はこちらへと顔を向ける。

「マリ、今日は日野さんから予約が入ったぞ。七時半から接待で行くから、よろしく頼むって」

「はい。日野さん含めて何人？」

「五人」

「じゃあ、ヘルプは四、五人でいいかな」

事務室の壁に貼られた、キャバクラ嬢の出勤表に目を遣りながらマリが呟くと、黒瀬が「あ、そうだ」と、酒焼けに近い、しゃがれ声を上げた。

「カオルもつけるから、お前指導してやってくれよ」

カオルと言うのは、黒瀬がスカウトし、最近入店したキャバクラ嬢だ。「お嬢様っぽい所が、オヤジ客にウケそうだろ？」などと、自分が既にオヤジであることを棚に上げて、黒瀬が自慢げに話していたものだった。

「うーん、カオルちゃんかあ」

まだ入店したてということもあり、カオルはまだ接客の一つ一つがぎこちない。マリの鼻屑客の中でも、一、二を争うほどの上客である日野に、そんな素人に毛の生えたレベルの子をつけていいものか、と、マリはつけ睫毛に囲まれた目を瞬かせた。しかも、接待ともなれば、粗相は許されないだろう。

「カオルちゃん、大丈夫かな？ 日野さんのお連れさんに、ご迷惑かけなきゃいいけど」

「そこら辺は、お前が何とかしてやってくれよ」

「酷いなあ。自分でスカウトして来ておいて、結局は人頼みなの？」

すると黒瀬は、煙草の煙と共に、はは、と声を上げる。

「そりゃそうさ。マリ大明神様のご指導には、敵わねーもん」

また「神様扱い」かよ、とマリは呆れたようにため息をつく。

何かと言うと、「マリ大明神様」だの「女神マリ様」などと、黒瀬はマリを神様のよう  
に扱うことが多い。それがマリの機嫌を取るためなのか、それとも黒瀬の癖なのかは、マ  
リにも分からない。

ただ言えることは、この黒瀬は、キャバクラ嬢の扱いに長けている、ということだ。

それは長年、多くのキャバクラ店を店長として渡り歩き、それぞれを一流店にしてきた  
だけはある、ということだろう。この「ミラージュ」が、凡百のキャバクラと違い、高い  
料金設定でも客足が絶えず、良い評判を保っていられるのも、黒瀬の努力の賜物だろう、  
とマリも納得はしていた。

そんな黒瀬は、何かと言うとこちらを持ち上げてくる。その代わりに、キャバクラ嬢の  
間で起きた揉め事などの対処を、全てマリに押しつけてくるのだ。

今度は「新人教育料」や「揉め事解決料」をせびってやろうか。そう思って腕を組み、  
マリは黒瀬を睨みつける。だが、黒瀬はそれを気にすることなく、煙草の灰を灰皿に落と  
しながら、話を続けた。

「それに、下手に俺が指導するより、売れっ子のお前に指導してもらおう方が、説得力ある  
んだよ」

それは確かにそうだ、とマリは納得した。どんなに優秀な店長とはいえ、実践をこなし  
てきた、キャバクラ嬢の指導に勝るものはない。

「そりゃ、私もミュキさんに、いろいろ教えてもらったけどさ」

マリがぽつりと呟くと、黒瀬は一瞬体を震わせ、目を見開いた。そしてそのまま、表情  
を固まらせていく。口に啜えた煙草が、じりじりと音を立てて灰になっていくが、それ  
をも気にする様子もない。感情の読み取れない顔のまま、黒瀬はマリを見つめていると、  
突然、「なあ、マリ」と声を上げた。

「お前は、ミュキみたいになるなよ」

「大丈夫だよ」

マリはあえて、元気な声で即答する。そうしないと、黒瀬が心配するであろうことを  
知っているからだ。

ミュキは、マリがこの「ミラージュ」に入店した頃に、ナンバーワンだったキャバクラ  
嬢だ。ゴージャスな美人で、何人ものVIP客が付いていたものだったが、三年前のある  
日、突然失踪してしまったのだ。

あの時の黒瀬の酷い落ち込み様は、今でもマリの脳裏に焼きついている。自分の店の  
売れっ子を失った、という単純なものではなく、何か別の感情をミュキに抱いていたの  
ではないか、と勘ぐりたくなるほどの様子だったのだ。

何にせよ、自分はミュキのようにはならない、とマリには自信があった。

妻子ある男性と駆け落ちしたのではないかと、言われているミュキのように、全てを捨  
てて、ここから逃げ出す気にもならない。そしてマリには、もう既に捨てるものなど残っ  
てはいなかった。

「おはようございまーす！」

事務室の前の通路から、いくつもの可愛らしい声が重なって聞こえてきた。数人のキャ  
バクラ嬢が事務室へと入り、タイムカードを押しながら、マリと黒瀬に挨拶をしていく。  
その列の最後にいたスマレが、「おはようございます！」と頭を下げた後、じっとマリの

顔を見た。

「あ！ マリさん、今日は肌もいい感じじゃないですか！」

「うん。今日は睡眠時間たっぷり取ったからねー」

「じゃあ、桜庭の夢も見なかった、ってことですね！」

目を細めて、冗談っぽく言うスマレに、マリは「そうそう」と頷きながら答える。

「桜庭学院出身で、婚約者もいるお嬢様の夢は、もう見なかったよ」

そう言うと、スマレはもちろん、他のキャバクラ嬢たちも、「やだー！ マリさん、ウケるんですけどー！」と笑い転げている。

唯一事情を知らない黒瀬は、「何だ？ その桜庭がどうの、ってのは？」と不思議そうにしていた。しかし、キャバクラ嬢同士の戯れ合いだろうと思い、それ以上は追求しようとしなかった。

マリはそんな黒瀬の態度にほっとしながら、スマレに「スマレちゃん、ちょっと」と声を掛け、手招きする。

「何ですか？」

跳ねるようにこちらへと歩いてきたスマレに、マリは耳打ちをした。

「今日、日野さんの接待の予約が入ったの。だからヘルプお願いね。で、カオルちゃんもヘルプで入る予定だから、くれぐれも気をつけておいて！」

「了解です！」

スマレはにっこりと笑い、敬礼するように手を額に当てる。

「日野さんかぁ！ また景気よく、お金を使ってくれるといいなあ」

スマレが嬉しそうにはしゃぐのを見ていると、いつもマリは、妹の翠を思い出さずにはいられなかった。彼女のこういった現金な所や、笑顔の雰囲気、とても翠に似ているような気がしていたのだ。

「要領が悪いんだから、お姉ちゃんは！」

翠は幼い頃から、そう言って、いつも姉であるマリを笑っていた。

あれは高校二年の頃だったろうか、とマリはふと思いを馳せる。

親に内緒でアルバイトをしていたのがバレてしまい、父に殴られたマリの頬を、翠が氷嚢で冷やしてくれていた時のことだ。「要領が悪い」としか言いようのない、姉の行動に呆れ、翠は深いため息を漏らしていた。

「何でわざわざバイトなんかするの？ 大体、うちは金持ちなんだし、お小遣いだって、たくさん貰ってるじゃない！」

だがマリは、ベッドに腰掛けたままで、「でも、仕方ないの！」と、強い視線を翠へと向け、反論する。

「私はこの家を出るために、お金を貯めたいんだから！」

「だーかーらー、それが要領の悪さだって言ってんの！ 大学を出たら、この家からは出られるんだから！」

「それを待てないから、高校を卒業したら出ていこうとしてるんじゃない！」

何かと言うと、自分たちの思うがままにしようとする父と母に、マリはいつの頃からか、反発するようになっていた。

小学校から桜庭学院に入れられ、勉強や作法、様々な習い事を強制的にやらされていたことには、まだ我慢ができたものの、最終的な進路まで親に決められるとなれば、マリは

黙っていられなかったのだ。

「私は、人と話したり、人を助ける仕事をしたいだけなんだよ」

長い髪を耳にかけながら呟くと、翠も負けじと「じゃあ、医者だっていいんじゃない？」  
と言り返す。

「患者さんと話すし、病気の人を助けられるよ」

「そうじゃないの！ そうじゃなくて、もっと人を幸せにするような仕事がいいの！」

マリは視線を横へと向け、部屋に飾ってある、いくつかの写真へと目を遣る。それは、バレエの発表会やコンクールの時のものばかりだった。

自分が舞台に立ち、風を切ってターンをしたり、大空を飛ぶかのようにジャンプをしたりすると、観客が皆、楽しそうに微笑んでくれる。あの時のように、多くの人を喜ばせる仕事に就きたい――それがマリの、長年思い続けていた、密かな願いだった。

「だったら、それはそれで、とりあえずお父さんとお母さんの言うことを聞いて、大学を出ておいてさ、その後で好きなことをやればいいのに。私はそれで十分だけどなあ」

その言葉通り、翠は実際にソツがなく、とても要領のいいタイプだった。何かと言うと、反発しがちなマリに比べると、翠は父と母にとっても、かなりの「いい子」だった。

しかし、父や母の見えない場所では、翠はしっかり遊びまくっていた。「友達の家で勉強してくる」と称して、ボーイフレンドの家で放課後の殆どを過ごしたり、合コンに参加したりもしている。

同じ父母の間に生まれた姉妹であるにもかかわらず、そういった要領の良さを、マリは持ち合わせてはいなかった。

「それができないから、出ていきたいって思ってるの！」

頬がまだジンジンと痛むのを感じながら、やっとのことで口を動かしてマリが叫ぶと、翠が困惑に近い表情を浮かべ始める。

「ねえ、本当にお姉ちゃんって、『桜庭ガール』なの？ 『桜庭ガール』なら、もっと人生を快適に、気楽に生きなきゃ！」

マリや翠が在籍していた桜庭学院に通う子供たちのことを、世間では「桜庭ボーイ」「桜庭ガール」と呼んでいた。

それは、国会議員や企業の重役クラス以上、そして医者、弁護士、といった、社会的地位の高い家庭の子息ばかりが集う、一貫校出身者への敬称でもあり、また、蔑称でもあった。

桜庭学院に通う子供の親たちは、競い合うように学院へ多額の寄付をし、そんな親の期待に応えようと、子供たちも「いい子」として振る舞う。それが、桜庭に通う家庭の、一般的な風景だった。

そんな桜庭学院の世界のことを、生徒や学生たちは自嘲的に「箱庭」と呼んでいた。人工的な箱庭のような世界で、それぞれが与えられた「いい子」を演じる。そのくせ、親や教師の見ていない所では、金に飽かして、羽目を外して遊び回っている、というのが現実だった。

例えば、マリの友人である、大企業の社長令嬢は、パッと見は「ザ・お嬢様」というような物静かなタイプだ。だがその裏で、毎夜クラブ通いをしている、と生徒の中では有名だった。風紀委員で、日々校則違反の取り締まりをしていた、ある国会議員の息子などは、酒や煙草はもちろん、怪しげな薬にまで手を出している、と噂が流れたりしたもの



だった。

そんな裏表を使い分けることこそが、「桜庭ボーイ」「桜庭ガール」と呼ばれる、「箱庭」出身の人間の処世術なのだ。

それは、上手にこの世を渡っていくための、大切な処世術。なのに、それを身に付けることを拒否したかのような姉を見て、翠はボブスタイルの髪を揺らしながら、大きくため息をついた。

「だけどさ、お姉ちゃんは、みんなに羨ましがられているんだよ」

「えっ！ な、何で？」

戸惑いを見せるマリから、翠は氷嚢を一端外し、頬の赤みを確かめる。大分腫れが引いたことに安心して、マリの顔をじっと見つめた。

「お姉ちゃんは、バレエが上手いしさ。あのジャンプなんて、本当に空に飛んでいきそうだもん。それに、恭介先輩とも婚約したんだし」

その言葉に、マリは表情を固まらせる。あの男の名前を聞いただけで、ぞっとしてしまうのは、やはり幼い頃から、散々あの男に罵倒され続けたせいだろう。

「でも、恭介と婚約したことだって、私は全然嬉しくないんだよ！」

恭介がいつもマリへと向ける、ぞっとするような冷めた表情を思い出し、マリは肩を竦めた。

「だってあいつ、『お前と婚約するくらいなら、雌豚とでも婚約した方が、マシだった』って、私に言ったんだから！」

「えーっ！ そんなこと、恭介先輩が言うなんて、信じられない！」

信じられないのは、こっちの方だ、とマリは反論したかった。しかし、恭介の本性を暴いた所で、信じてもらえないことは分かっているので、マリは口をひたすら噤む。

目の前では、翠がうっとりした視線を天井へと向け、「だってさー、恭介先輩はいつも優しいしー」と、甘えたような声を上げていた。

「この前だって、私がちょっと成績が落ちたって言ったら、勉強を教えてくれたんだよ。すごく分かりやすかったし、優しく教えてくれたんだから！ そんな恭介先輩が、そんなこと言うはずないよ！」

「言うの！ あいつ、私にはそういうことを言うんだよ！」

マリと同じ年で、小学校の頃からずっと一緒だった恭介は、何かあるとマリに暴言を浴びせ、軽蔑したような視線を向ける。翠と同様に、マリを「要領の悪い女」呼ばわりをし、「そんなお前を見ていると、こっちまで要領が悪くなる」と、いつもマリを罵っていた。

だが恭介は、日常は「成績優秀で文武両道の好青年」という完璧な仮面を被り、マリ以外の人間には、その裏側にある本当の顔など、決して見せはしないのだ。陰では、夜な夜な遊び回り、複数の女と同時に交際をするような、とんでもない奴なのに、とマリは急に悲しくなる。

代々、国内有数の大病院グループを経営する家の、跡取りとして生まれた彼は、それにふさわしい仮面を付ける術を、幼い頃から身につけていた。それはまさに、「桜庭ボーイ」の真骨頂と言えるだろう。

たとえ親が決めたとは言え、そんな裏表が激しく、しかも自分を嫌っている男と、何故婚約しなければならなかったのか。

そう考えると、頬に残る痛みと相まって、心も体も辛くなり、マリは思わず涙を零しそ

うになった。

「でもさ、恭介先輩っていう、みんなの憧れの的と婚約したんだから、お姉ちゃんは少しぐらいうぬぼれてみたら？　うちのクラスの、恭介先輩のファンの子なんて、婚約したことを聞いた時、寝込みそうになってたんだからね！」

「でも、そんなの、親が決めたことだよ！　私の意志じゃない！」

「意志じゃなくても、何でもいいの！　とにかくお姉ちゃんは恵まれてる、ってこと！」

恵まれてる、という言葉に、違和感を覚え、マリは反射的に翠を睨みつける。

誰もが羨むような裕福な家庭に生まれ、自分もまた、そんな家庭の主になるように育てられたことは、確かに恵まれているだろう。

だが、マリはそんな「箱庭」の世界に、馴染むことができなかった。何でも言うなりにさせ、自由を奪う親に対し、がむしゃらに反抗し、自由を求めていたのがマリだった。大きな翼を持ちながらも、それを羽ばたかせることもできず、手枷足枷で「箱庭」の中に縛られている――この自分の育ってきた環境に、マリはそんなイメージしか持てなかったのだ。

「だーかーらー！　手枷足枷なんて、お父さんとお母さんに従って、大学を出たら、いくらでも外せるんだからさー！　本当に要領悪いよねえ、お姉ちゃんって！」

そうやってマリを笑っていた翠も、もう大学を卒業しただろう、と思い、マリはため息をつく。自分とは違い、きちんと「いい子」を演じられる妹ではあったが、喘息持ちだったことを、今更ながら思い出した。季節の変わり目になると苦しげに咳込んでいたものだったが、今は大丈夫だろうか。

そして、ごめんね、と心の中で呟いた。結婚する相手までも、高校の時から決められていた、姉である自分が、あの家を飛び出したのだ。そのせいで、あの家における義務が翠一人に押しつけられているかもしれない、と思うと、急に気が重くなった。

それでも、もう後戻りはできないのだ。そして、後悔も何一つ、感じてはいない。

「おい、マリ。今日も頼んだぞ。月末も近いし、店のノルマを今日で一気に達成させる勢いでいけよ」

黒瀬の言葉で、マリは我に返り、咄嗟に笑顔を作る。

「はいはい！　じゃあ、戦闘準備してきまーす」

そう言ってスマイルと共に事務室を出ると、隣の控え室に入り、自分のロッカーを開ける。そこにかけてあるドレスの中から、今日着るパープルのドレスを取り出すと、着替えをしながら、予約を入れてくれた日野のことを考える。

日野は、システム開発会社の専務で、いつもこの店を使っては、大金を落としてくれる上客だった。接待というならば、ケチケチせず、いつも以上に金を使ってくれるだろう。

では、こちらとしては、彼から金を引っ張り出すことを考えるのみだ。それが自分の、キャバクラ嬢としての仕事だ、とマリは必死で自分に言い聞かせた。

「マリさん、二十番テーブルに、日野様がいらっしゃいました」

客がトイレに行っているのを見計らい、六番テーブルについていたマリの許に加藤がやって来て囁く。

開店直後からこのテーブルにいる客は、既に二時間近くも滞在している。もうそろそろ帰る頃合いだろう、と思っていたマリは、「分かった」と頷いた。

「もう少しでこのお客様が帰ると思うから、何とかヘルプで繋いでおいて」

「分かりました」

トイレから戻ってきた客は、マリの予想通り、すぐに店を後にした。その客を見送った後、マリは加藤に案内され、ホールの奥にある、VIP席とも言える二十番テーブルへと向かう。

コの字になった大きなソファには、数人のヘルプのキャバクラ嬢と日野の部下たちが、交互に席に着いているのが見える。そして角になった部分には、日野の姿があった。いつもならば、上座とも言えるソファの中央に座っているはずなのに、と思い、マリはソファの中央へと視線を移す。そこには、見知らぬ若い男が座っていた。

これが接待客なのだろうか、と予想しつつ、マリは日野が正面に見える所へと足を進めて立ち止まると、頭を下げた。

「日野さん、お待たせして申し訳ありません」

すると日野は、眼鏡の奥からマリを見て、にっこりと笑う。

「やあ、マリちゃん。相変わらず売れっ子で何よりだよ」

「いえいえ。私もここでは古株ですから、皆さん『もう辞めるんじゃないか』って、気が気じゃないみたいで、会いに来てくださるだけなんですよ」

「ははは！ そんなことはないだろう！ みんな、心からマリちゃんに会いたいから来ているんだよ！」

日野の高笑いを聞きながら、マリはテーブルとソファの間をすり抜け、日野の隣に腰を下ろす。ヘルプとしてついていたキャバクラ嬢たちと、目配せを交わしながら、上座にいる男へと静かに視線を向けた。そして一瞬で、その男の値踏みをする。

恐らく、歳はマリとそうは違わないだろう。二十代半ばから、後半、といった所だ。鼻筋の通った、綺麗な顔立ちをしている男だ、と思わず唸った。硬そうな髪を、嫌みのないツブブロックにしているのも、清潔そうで好感が持てる。

そして、その男が身に付けているものへと目を移すと、スーツやネクタイ、腕時計から靴まで、全てが上質なものだった。

特に時計。あれは確か、ハリー・ウィンストンの限定品だったはずだ。こんな高価なものを身に付けられる、ということは、かなりの稼ぎがあるか、それとも実家が金持ちなのか。その、どちらかだろう。

つまり、接待客、とは言うものの、かなりの大口の相手に違いない、とマリは素早く判断し、日野へと顔を向ける。

「日野さん、こちらのハンサムな方を、ご紹介していただけませんか？」

そう言って、マリが男の方へと手を差し出すと、「ああ、そうだ。紹介が遅れたな」と、日野は自分の右の方にいる男へと体を向けた。

「こちらは、我が社との契約をご検討いただいている方なんだ。この方のご実家は、全国にいくつも大病院を経営なさっていてね、お父様がその理事長をなさっているんだよ」

「まあ！ そうですか！ はじめまして。ようこそいらっしゃいました」

マリが座ったままで、その男へと挨拶をする。スマレとヒカルを両脇にしたその男は、端正な顔立ちの中で一際目立つ、美しい形をした大きな瞳をマリへと向けた。そしてすぐさま、「はじめまして」と挨拶をしながら、ハリウッドスターのような、完璧な笑顔を見せた。

「日野さんから、ここには素敵な女性がいらっしゃるって伺っておりましたので、楽しみにしてきましたんですよ」

柔らかな口調で、淀みなく言葉を繰り出すその態度に、マリは見覚えがあるような気がした。だが、いつ、何処で見たのかは全く思い出せず、必死で記憶の糸を手繰り寄せようと、その男へと視線を向け続ける。男もそんなマリの視線に応えるように目を細め、唇を円やかにカーブさせて微笑んだ。

その笑顔には、一分の隙もなかった。優秀なビジネスマンが見せる愛想笑いにも似ていたが、それよりももっと徹底しているもののように、マリには思えた。

決して相手に嫌な感じを与えず、ひたすら温かみのある表情を周りに照らし出す様子は、若いながらも並の男ではないように思えて、マリの心には警戒のサイレンが鳴り始める。だが、それ以上に、何かがマリの心の中に引っかかっていた。

奇妙な不安が湧き上がってくるのを隠しつつ、マリは目の前にある、日野の空いたグラスを手取る。

「いずれ、この方がお父様の跡を継がれて、理事長となられる予定なんだ。そのために、商社に勤めていらっしゃるのを退職されて、今はご実家の経営の勉強をなさっているんだよ」

まるで己の自慢のように話す日野を見ながら、マリはグラスに氷を入れていく。

「お若いのに、それはご立派な方なんですね！」

ありきたりのお愛想をしながら、マリは頭の中に、更なる不安を積み重ね始めていた。

見覚えのある風貌に加えて、総合病院の経営者の家系、という何処かで聞いたことのある経歴に、嫌な予感しか覚えない。

マリはグラスにブランデーを注ぎつつ、上座にいる男へと、微かに目を向ける。するとそこには、マリへと注ぐ男の視線があった。どうやら男は、ずっとマリを見ていたようだった。

ソファに深く腰掛けて足を組み、グラスを傾けながら、優しい眼差しをこちらへと向けている。両隣にいるスマレとヒカルが話し掛ければ、品のある物腰で頷いたり、楽しげに微笑んだりしているものの、彼はマリへと眼差しを向けることを忘れていない。

よく見れば、そんな態度も、記憶の中にある一人の男に結びつくような気がした。恐ろしいほど整ったルックスに、硬そうな髪を感じ。そして、仮面のような、あの笑顔。

全てがああ男の記憶へと集約していきそうになるが、マリは必死でそれを打ち消そうと、笑顔を作る。

あんな男のほざはないだろう。きっと、他人の空似だ。

自分にそう信じ込ませようと、マリは何度も繰り返し心の中で唱える。だが、マドラーでグラスの中を掻き混ぜれば、自分の心までもがぐるぐると回り出すのを感じていた。

「ご実家が病院ってことは、お医者さんなんですか？」

隣で接客をしていたスマレの問いに、男は「いいえ。違うんです」と、首を振って答える。

「うちは代々、病院の経営だけを主にしているんですよ。患者様はもちろん、医師や看護師、そして事務員までも、快く過ごせる病院を作ることに、明治時代から尽力してきましたんです」

「そうそう！ そうなんだよ！」

日野が男の言葉に反応し、興奮したかのように声を上げる。

「『藤本メディカルセンター』って知ってるだろう？ あそこや、日本全国にある系列の病院の経営をなさっているんだよ、この藤本さんのご実家は！」

藤本、という日野の言葉に、マリの鼓動が一気に跳ね上がる。どくん、と鳴る心臓の音を全身で感じ、思わず目を見開いた。

間違いない。絶対にあいつだ。

そう思いながらも、マリは決してその感情を表には出さず、微笑みだけを浮かべ、男へと向ける。そして、彼の喉仏の近くに目を遣った。そこに小さなホクロが二つ並んでいるの見て、絶望的な気分になった。

それでも何とか視線を上げ、男の顔を見つめる。彼の母親によく似た、この男の端正な顔立ちは、確かに思い出の中のあいつのものだった。幼い頃より、マリへと嫌悪感を露わにし、最後には「もう二度と、俺の前に現れるな」と告げた、あの男の、完全体とも言える「仮面」を付けた姿だ。

そして一瞬で、この男の記憶が、マリの頭の中へと蘇り、溢れ返ってくる。

この男と初めて会ったのは、桜庭学院の小学部の入学式でだった。そして高等部の卒業式の日にもマリが家を出る時まで、この男はずっと、マリを嫌い続けていた。そしてマリにとっても、この男は嫌いな相手でしかなく、一番会いたくない人間でもあったのに。

それなのに今、こうしてマリの目の前に、この男が現れてしまったのだ。

「藤本」と呼ばれたその男から、マリが目を離すことができずにいると、男が不思議そうな顔をして、「どうしました？」とマリに尋ねる。

まずい、と思い、マリは微笑みを強めると、「いえ、失礼しました」と頭を下げた。

「知人が以前、藤本さんのご実家の病院にお世話になったことを、思い出したものですから」

マリの咄嗟の嘘に、男は「そうでしたか」と頷き、苦笑いをした。

「よかった。こちらをじっと見られていたので、僕が何かしたのかと思いましたよ。まるで、珍しい鳥でも見つけたかのように、こちらを見ていらっしまったものですから」

鳥、という言葉聞いて、マリは高校生の時に、この男——恭介の実家に、家族で招待された時のことを思い出していく。

「こういう鳥って、飛べないんだよ。何でか知ってるか？」

マリにしか見せない、彼特有の冷めた表情を湛え、あの時、恭介はマリに尋ねたのだ。

恭介の父の趣味で飼われている、鑑賞用の鳥が入ったゲージが並ぶ部屋で、マリは恭介と二人きりで鳥を見ていた。その中でも、特に大きく美しい羽を持つ鳥の前で立ち止まると、恭介はその言葉を口にした。

マリには答えが分からず、無言で首を振った。すると恭介は、ふん、と鼻を鳴らし、目の前のゲージへと手を伸ばす。

「鑑賞用の鳥は、逃げて飛んでいけないように、羽を切るんだ。後ろの辺りにある、風切り羽っていう所を」

その部分をマリに指差して教えると、恭介は「俺たちは所詮、この鳥と同じだ」と呟いた。

「どういうこと？」

恭介の話が腑に落ちないマリは、眉を顰めて恭介に尋ねる。すると、ゆっくりと恭介はマリへと視線を向け、感情の籠もらない声を出す。

「羽を持ちながらも、何処にも飛んでいけず、狭い『箱庭』の中で、飼い主を喜ばせるためだけに存在してる」

「飼い主、って」

マリが尋ねようとするものの、恭介はそれを遮るように話し続けた。

「俺たちの飼い主の願いはこうだ。『自分たちの言いなりで生きろ。そして、いい血統のオスやメスと結婚して、繁殖しろ』ってな。ならば、それに従う以外に、何ができるって言うんだ？ 鑑賞用の鳥は、ちゃんと鳥籠の中で大人しくしているのが筋ってもんだよ」

「あんた、それ本気で言ってるの？」

マリは思わず視線を強め、無表情の恭介を睨みつける。



「私は、鑑賞用なんて嫌。ちゃんと自分の羽で、空を飛ぶ鳥じゃなきゃ、嫌だ」

すると恭介は、唾しぶきを飛ばさんばかりに、「バーカ！」とマリに向かって叫んだ。

「もう俺たちは羽を切られた鳥なんだぜ？ 生まれた時からな！ 何処かへ逃げたくても、何処に行けるはずもないんだ」

それはマリも実感はしていた。社会的地位や名誉のある親に守られて、こうして生きてきた子供が、その庇護なしで生きていくのは、容易なことではないだろう。

だがそれでも、マリは諦めたくなかったのだ。「箱庭」以外の所へ出ていくことも、大空を自由に飛び回ることも。その気持ちをなくすまいと、ずっと自分を励まし続けていたのだから。

恭介の放つ、負の力を帯びた雰囲気には負けないように、と心を奮い立たせて、マリは彼を見て、強い言葉を口にする。

「たとえそうだとしても、私は必死で飛びたい」

決死の覚悟を決めたかのような、彼女の様子に、恭介は一瞬怯んだかのように見えた。が、彼はすぐに、表情を怒りに塗れたものへと変えていく。

「なら、飛べなくするまでだ。どんな方法を使ってでも」

この時の恭介の体には、まるで煉獄の炎を纏ったかのように、憤怒の思いが溢れていた。何故あの時、恭介がそんなに怒っていたのか、マリには今でも分からない。

だが、その後、親たちから告げられたことを考えれば、彼の怒りは、そのことが原因だったような気もするのだが。

「藤本さん、聞いてくださいよ！」

大きな声と共に、ぽん、と日野に肩を叩かれ、マリの目の前に広がっていた、過去の面影が消えていく。「このマリちゃんはね、キャバクラ嬢ではあるものの、銀座や六本木の高級クラブのホステスにも負けないと、私は思っているんですよ！」

妙に誇らしげ語る日野を見て、マリは咄嗟に「もう！ 日野さんったらお上手ですね！」と、声を上げて笑う。すると日野は、「いやいや、本当だよ」と、酔いが回ったかのような口調で答えた。

「こうして冗談を言っても、そこはかたなく気品が漂うしね。さあ、是非、藤本さんの隣に行って、お相手をしてくれよ！」

嫌だ。あいつの隣になど、行きたくない。

頭の中にある本当の自分が、そう絶叫していた。しかし隣にいる日野は、必死の形相で「頼んだよ、マリちゃん」と、小声で囁く。

「藤本クリニック系列の病院での、会計システムの契約がかかっているんだ。何とか、彼を上手く持ち上げてくれ！ 頼む！」

その言葉に、マリは歯を食い縛る。そして自分の中にあるプロ意識を掻き集め、振り絞れるだけ絞ると、にっこりと笑った。

「分かりました」

マリはスマイルと目配せを交わすと、二人で同時に立ち上がった。ゆっくりと歩みを進め、スマイルと入れ替わるように、男の隣の席に腰掛ける。そんな移動の間じゅうも、男はマリから目を離そうとしない。そしてマリが、「よろしくお願い致します」と頭を下げた後も、じっとマリを見ていた。

男の視線に当てられたように、マリは次第に体が痺れていくのを感じていた。だが、この男に、正体を見破られる訳にはいかない、と何とか自分を奮い立たせる。

そう、私は「マリ」なのだから。全てを捨てて逃げ出し、厚化粧という仮面を被った自分に、この男が気づくはずなどない、と。

心の中にある、本当の自分を完全に閉じ込め、マリは男の前に置かれたグラスへと目を遣る。ウィスキーの水割りが入っているようだが、酒があまり進んでいない。

「よろしかったら、他のお飲み物を用意しましょうか？」

マリが問い掛けると、男は驚いたように目を丸くする。

「実は、他の飲み物をお願いしようか、と思っていた所なんです。よく分かりましたね」

男は相変わらずマリの顔を優しい眼差しで見つめながら、「できればワインがいいかな。赤のね」と、大きな瞳を輝かせる。

この男が、こんな笑顔を自分に向けるとは、とマリは滑稽に感じながらも、「では今、ワインリストをお見せしますね」と、ボーイを呼び、ワインリストを持ってくるように指示した。

ボーイが素早く持ってきたリストを、マリが開いて手渡すと、男はリストに目を走らせながら、一言呟いた。

「マリさんは、バレエをなさってはいませんでしたか？」

「え？」

「歩いている時も、座っている時も、とても背筋が伸びている。腕を伸ばしても、指先までピンと真っ直ぐで綺麗なもので、心と、そう思ったんですよ」

思いも寄らない質問に、マリは「い、いえ。バレエはやっていません」と答える。すると男は、「そうでしたか」と、急にしょんぼりとした表情になった。

「僕の幼馴染みに、バレエを習っていた女の子がいたんです。その子の仕草に、マリさんの仕草が似ていたものですから」

そう言って、男はワインリストから顔を上げると、マリへと視線を向ける。そして大きな瞳を更に広げるようにして、マリの顔に見入った。その視線のあまりの強さに、マリは仰け反りそうになる。背中の筋肉を強ばらせて、表情をも固めてしまいそうになっているマリを、男は凝視し続けていた。

「そういえば、仕草だけじゃなく、顔も何となく似ているなあ」

そりゃそうだろう。それは私だもん。

マリは心で苛立ったように呟くが、そんなことはおくびにも出さない。とにかく、こいつにバレないように、とひたすらにこやかな表情を男へと向けていた。

すると男も、頬を緩めてにっこりと微笑み、リストにある銘柄を一つ指差して、ボーイに注文する。そしてリストを手渡すと、再びマリに温かな視線を向けた。

「マリさんを見ていると、あの子のことを思い出しますね。何だか、懐かしい感じだ」

懐かしいもへったくれもない、とマリは微笑みながらも、脳内で毒づく。私としては、こいつのことなど、忘れたい思い出でしかないのに、と。

「では、その幼馴染みだった方も、美人だったのですね。私みたいに」

苦し紛れにマリが冗談めかして答えると、男は、ははは、と軽やかな笑い声を上げた。その様子を見て、男がマリを気に入っていると思ったのか、日野が嬉しそうにニコニコとしている。

気楽そうな日野を見て、マリは内心恨みたくもなったが、これは仕事だ、と瞬時に割り切る。この道に進んだのは自分の選択で、たまたまこいつが客として、ここに来てしまっただけなのだから。

だからこそ、この男に見つかることなく、仕事を全うしなくては、とマリが気合いを入れていると、ボーイがワインを持ってきた。ワインのコルクを抜くボーイの姿を見ながら、男は「その、マリさんに似ている幼馴染みのことですよけどね」と脚を組み直して、マリを見る。

「実は、ただの幼馴染みじゃなかったんです」

「えっ！」

いや、驚くことじゃない。確かにただの関係ではなかったのだ、こいつとは。だがマリは、あのことを口に出されるのでは、と思わず両手を股の上で握り締める。

すると男は、しれっとした表情で、マリの予想していた言葉を口にした。

「その幼馴染みとは、婚約までしたんですよ」

マリは一瞬顔をひきつらせたものの、すぐに仮面のような笑顔を取り戻し、「まあ、そうでしたか！」と、わざとらしく驚いてみせた。

悔しい、とマリは自分を責めた。いくら自分のことを言われているとはいえ、妙に浮き足立って、こんなことしか言い返せない自分に腹が立つ。次第に焦りの気持ちがせり上がってくるのを感じながら、マリがワインの入ったグラスを手渡すと、男は「ありがとう」と微笑む。

「申し訳ないですね。僕のこんな話を聞いても、面白くないでしょう？」

「いえ。初めていらっしゃったお客様のお話は、どんな話題でも新鮮で面白いですよ！」

こうしてソツなく答えることができ、マリは何とか落ち着きを取り戻せそうだった。それに、この男は恐らく、自分の正体に気づいてはいない。その確信が、マリに安心感を与え、キャバクラ嬢としての意識を取り戻させようとしていた。

男はワインを一口飲むと、マリにもワインを勧める。

「マリさんも一杯、いかがですか？」

「よろしいんですか？ では、少しだけいただきます」

笑顔のマリが持ったワイングラスに、男は慣れた手つきでワインを注いでいく。

それはマリにとって、奇妙な感覚だった。幼い頃からマリに嫌悪の目を向け、そしてマリ自身も嫌っていた男と、こうして和やかに会話をし、酒を飲むなど、考えもしなかったことだったのだ。

婚約者だったと言っても、お互いの親が決めた間柄だったこともあり、いつもお互いに反発し合っていた記憶しかない。そして、常にマリへと向けられていた、この男の放つ憎悪に近い表情も、今は見なくて済んでいる。

このまま時間が過ぎて、ここで楽しく過ごし、帰ってもらえれば十分だ――マリはそう思い、ワインに口を付け、「美味しい！」と叫ぶ。

「これ、美味しいですね！ こんな高級なワインは久しぶりなので、悪酔いしないように気をつけないと」

「悪酔いされても、マリさんなら、きっと楽しい悪酔いでしょうね」

そう言って微笑む、この男の仮面の表情にも次第に慣れてきて、マリは、ふふふ、と笑う。

「それが大変なんですよ！ 私が悪酔いすると、だれかれ構わず、近くにいる男性を好きになってしまうんです」

うん、調子が出てきた、とマリはほっとしながらワインを飲む。こういったネタを言うことこそが、キャバクラ嬢としての真骨頂、とマリは完全に「マリ」となり、男を見つめる。すると男は、嬉しそうな表情をしながら、「ねえ、マリさん」と呟いた。

「申し訳ありませんが、僕のつまらない話をもう一つ、してもいいですか？」

「ええ、どうぞどうぞ！ どんなつまらなさか、興味がありますね」

マリの言葉に、男は肩を竦めるようにして笑うと、急に表情を真剣なものへと変え、マリの顔をじっと見つめた。

「マリさんは、小谷彰教授、という方をご存知ですか？」

突然出されたその名前に、マリは思わず体を、びく、と震わせる。

何故、今ここで、その名を出すのか、とマリは目を見開いた。その目に映る男の表情からは、何の感情も意図も読み取れない。仮面のような優しい笑みが、ただそこにあるだけだった。

「い、いえ。存じませんけど」

口籠もりながらマリが答えると、男はマリから目を逸らし、正面へと顔を向けた。

「小谷教授は、桜庭学院大学の医学部の教授で、脳外科を専門にいらっしゃる方なんです。ご自身が素晴らしい医師であるだけでなく、優秀なお弟子さんをたくさん輩出して、日本の医学界の権威、とまで言われている方なんですよ」

「そうですか」

マリは相槌を打ちながら、男の横顔へと視線を注いでいた。美しい鼻筋が、顔の上に影を落としているのを見ながら、男の次の言葉を待っている。

「その小谷教授には、二人の娘さんがいらっしゃって、美人姉妹、なんて言われて有名なんです。それでね、この前、小谷教授にお会いして、娘さんたちのことを伺ったんです」

男がそこで話を切り、ワイングラスを傾ける。マリはそんな男の様子を見ながら、えも言われぬ不気味な何かが、自分へと迫ってきているように感じていた。

ドレスの下では、うっすらと体が汗ばみ始めている。これは明らかに冷や汗だ、とマリは感じ、顔だけは必死で笑顔を取り繕いながら、男の様子を眺めていた。

「そしたら、下の娘さんの翠ちゃんは、お父様の跡を継がれるべく、現在研修医として勉強中とのことで、小谷教授は大変喜んでいらっしゃいました。彼女が、自分と同じ道を進んでくれたことが、嬉しくて仕方ない、という感じでしたね」

男は手に持っていたワイングラスを、静かにテーブルへと置く。そして大きく息を吐き出し、ソファの背凭れに寄りかかった。

「だけどね、不思議なことに、小谷教授は上の娘さんのことになると、口を噤むんです。それでも何とか聞き出してみると、上の娘さんは、海外でボランティア活動をしていて、日本に帰ってくる予定はない、なんておっしゃる」

男は困ったかのように首を振ると、こちらへと顔を向ける。その顔には、笑顔の仮面が付けられていたものの、それが次第に別なものへと変わっていくのに、マリは気づいていた。

「で、その海外にいるはずの人間が、どうしてここにいるんだ？」

これまでとは全く異なる、男の低く響く声に、マリは息を呑む。

目の前にいたはずの、ハンサムで穏和な青年は、いつの間にか、マリのよく知る、憎しみの意識をこちらへとぶつける男へと変わっていた。

「あら、何のことです？」

マリが笑顔を崩さずに答えると、男はふん、と鼻で笑う。

「しらばっくれたって、無駄だぞ、アイ」

久しぶりに聞く、その呼び名に、マリは思わず体を大きく震わせた。

自分を「アイ」と呼ぶのは、この男だけだった、と今更思い出しながら。

## 愛と叫ばないで (1)

<http://p.booklog.jp/book/58092>

2012年10月25日 Vol.1 配信開始

2012年10月26日 Vol.2 文章訂正のため、更新

著者 青井由

著者プロフィール <http://p.booklog.jp/users/aioiyoshi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58092>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58092>

表紙イラスト なま (<http://nm.dlb.moo.jp/>)

電子書籍プラットフォーム ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 株式会社ブックログ

◎この電子書籍についてのお問い合わせ、著者へのご連絡等は、

下記メールアドレスへお願い致します。

[yaplanning@gmail.com](mailto:yaplanning@gmail.com)

©無断転載・複製・アップロードを禁じます。

©この電子書籍に掲載されている全ての作品は、フィクションであり、

実在の人物・団体・事件などには一切関係ありません。